



木村 栄記 さん

(経済学部経済経営学科4年)

水中のファイター

新潟県柏崎市は「水球のまち・柏崎」と呼ばれている。その歴史は昭和37年に遡る。当時、2年後に開催される予定だった新潟国体で優勝するために柏崎市の高校水球部から始まったという。今では、柏崎アクアクラブでの小学生・中学生コース、高校選抜、強豪の社会人チーム・ブルボンKZ。そして、写真の精鋭たち新潟産業大学・水球部（男子・女子）と、年齢・性別を問わず、スポーツの枠を超えた「文化」として進化しているのだ。その新潟産業大学・水球部を率いるのは主将の木村栄記さん。「4月に新入生を迎え、男子28名、女子10名、総勢38名の部員たちの向上心や同じ目標に向かう意識の統一に心を配っています。目標はインカレベスト4と日本選手権の出場です」。主将としての想いを語る木村さんは、もともと山形県出身だ。泳ぐことが好きで、そこに球技とチームプレーの要素のある水球を中学生の時に始めた。中学で全国制覇とMVP、高校時代も水球部で主将を務め、インターハイ準優勝という輝かしい実績を持つ。その木村さんが大学進学の際に「水球のまち・柏崎」の環境のなかで水球をさらに極めたいという想いを抱いたことは想像に難くない。「日本代表クラスの選手がいるブルボンKZというチームと練習していくなかで、自分たちも、柏崎の代表なんだという気持ちも強まりました」。水球は、水中の格闘技と言われるしており、水深2メートルの足のつかない深さのプールで、ボールを片手で扱い、ゴールを指すタフな競技。見えない水の中で体をぶつけ合う駆け引きもある。選手たちは、まさに「水中のファイター」なのだ。「私のポジションはゴールキーパーなので、自分のプレーひとつで、チームのモチベーションに影響が出ます。試合全体を見る視野でコントロールしながら、チームを支えていきたいと考えています」。木村さんは、これから水球を目指す人たちにもメッセージをくれた。「水球だけでなく、挨拶や礼儀、ボランティア活動などにもしっかり取り組み、人間としての成長を第一に考えています。常に自分たちの行動や意識を高いレベルに持って挑戦していきたいと思います」。水球のまちで切磋琢磨する熱きファイターのまなざしは、とても真摯なものだった。

(写真・文／西山俊哉)